

消 息

八巻和彦先生をお送りするにあたって

八巻和彦先生は、2018年3月末をもって早稲田大学をご定年退職されます。先生のご退職にあたり、商学部教員を代表してご挨拶させていただきます。

八巻先生は、1971年に早稲田大学第一文学部西洋哲学専攻を卒業した後、東京教育大学（現筑波大学）大学院修士課程、博士後期課程に進学されました。1971年和歌山大学助手に着任後、講師、助教授、教授に昇進され、1990年に商学部に着任されました。また商学部着任後、2000年に京都大学より博士（文学）の学位を取得されています。

学内では、商学部学生担当教務副主任、学生部副部長、広報室長、早稲田大学系属早稲田中学高等学校校長をお務めになられました。また学外では、国際クザヌス協会学術顧問、中世哲学会理事、米国クザヌス学会（The American Cusanus Society）名誉顧問、日本クザヌス学会会長、比較思想学会理事などを歴任されています。

ご研究業績としては、12冊のご著書の他、数多くの論文、学会発表、招待講演などを発表されています。特筆すべき点としては、先生がドイツ語で発表された論文が、2017年ドイツにおいて“*Anregung und Übung. Zur Laienphilosophie des Nikolaus von Kues*”という書名で1冊の図書として刊行されたことです。近年、研究の国際化がいわれませんが、外国語しかもドイツ語の単著を刊行する日本の研究者は稀有であり、先生の研究者としての力量を端的に示していると思います。

先生のご専門は哲学、なかでも中世末期ドイツの思想家ニコラウス・クザヌスに関連した領域です。先生がクザヌス研究を志した経緯については、先生が岩波文庫の1冊として出版された翻訳書『神を観ることについて』の解説において、概略以下のとおり記されています。すなわち、高度経済成長期に高校生・大学生生活を過ごすなかで、国内では即物的で数字ばかりを尊重する風潮がはびこり、環境破壊と農業の衰退が進む一方、国外ではヴェトナム戦争が泥沼化し科学技術の発展による大量殺りくが繰り返られる状況を目の当たりにして、社会と世界に対する違和感を持っていた。そうした状

況に対して思想界では、近代化の徹底が喧伝されていたが、マルクス主義、実存主義、現象学などの近代思想は、「人間という存在そのものの弱さに対する認識がほとんど存在しない」ため、自分が有していた違和感を解消してくれることはなく、次第に近代以前の中世思想に惹かれるようになった、ということです。

先生が学生時代に認識した状況あるいは現代社会の諸問題は、表層的な様相は変化しつつも、存続しているといえるでしょう。それゆえに、先生が昨年刊行された『クザヌス 生きている中世—開かれた世界と閉じた世界』（ぶねうま舎刊）においても、グローバル化、アイデンティティ、社会の崩壊など、現代の諸問題に関して論考を加えられています。先生は、商学部において、哲学、倫理学などの講義の他、「現代の諸問題」というオムニバス形式の科目のコーディネータを長年にわたり務められました。まさに先生のご研究を反映された授業であったといえます。

個人的な話題になりますが、先生とは教員組合の執行委員を同時期に務めました。先生はたしかその時、広報部長を務められましたが、理事会との団体交渉の席でも、冷静で紳士的な態度を保ちつつ、毅然と組合側の主張を述べておられたことが印象に残っております。

早稲田大学の規程では、心身ともにご健康であったとしても、満70歳をもって、教壇に立つことはできなくなっております。この規程に沿って、八巻先生は、この3月をもって早稲田大学商学部の教壇を去られますが、研究者としての人生に定年はありません。八巻先生のこれまでの早稲田大学とくに商学部に対するご貢献に深甚なる感謝の意を表するとともに、今後ともご健康に恵まれ、いつまでも研究に携われることを祈念して、私の送別の辞とさせていただきます。

早稲田商学同攻会長

藤田 誠